

平成23年度 防衛大学校開校祭 第35期ホーム・ビジット・デー (HVD)

防衛大学校は、11月12、13日の両日、第59回開校祭を開催しました。

今年のテーマは、「結（ゆい）－結集から再生へー」、東日本大震災の被災地で見られた人と人の結びつきが復興を可能にし、それが日本全体の再生につながる。という思いを込めたテーマです。正しく、人と人の結びつきを改めて国民に示した自衛官、その候補生たる防衛大学校学生に相応しい言葉であると思います。

絶好の秋晴れの中、被災地の復興を願う学生の気持ちをエネルギーに変えた力強い開校祭は、約1万7千人の来場者を魅了するものでありました。

そのような中、第35期生の卒業20周年記念行事（以下 HVD という）は、稲月35期生（空）を中心とした期生会委員による諸準備と母校防大特に防衛学群職員の多大なご支援をいただき、同期生は108名、ご家族も含めて251名が参加し、終始和やかな雰囲気で行われました。

35期生は、昭和の最終年である63年入校、入校時は620名という最大規模の新入生を迎えました（卒業者数500名）。平成4年に卒業、バブル期ということもあり民間に移った卒業生も多く、今回も22名という多数の途中退職者が参加していました。

受付風景



開校祭に先立ち期生会の代表者が武藤防衛学群長、山下訓練部長をそれぞれ表敬訪問し、学校側の多大な支援に対して御礼の言葉を述べました。

この後、五百箇頭学校長、渡邊・高嶋両副校長、田中幹事を表敬訪問し、今回のHVDを報告しました。五百箇頭学校長からは、卒業生の近況についての質問や今次災害派遣をはじめ自衛隊の中核で活躍していることに対する労いの

言葉と、防衛大学校の学校改革についてのお話があり、短時間ではありましたが有意義な懇談となりました。

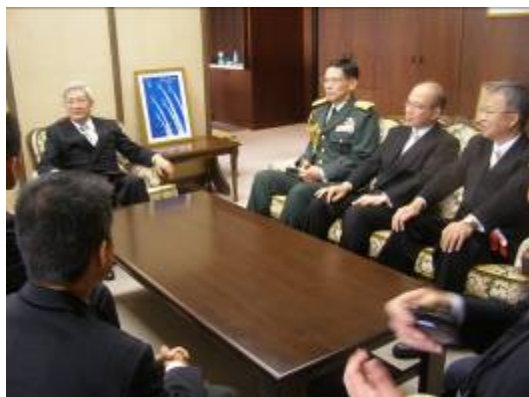
防衛学群長表敬



訓練部長表敬



学校長表敬（副校長、幹事同席）





その後、観閲式やブルーインパルス・空挺降下などを家族と共に見学し、学生の姿に過去の自分の姿を重ね合わせていました。

観閲式にあたっての学校長式辞においては、冒頭において35期生のHVDが紹介されました。また、ブルーインパルスの隊長は35期生であり、同期が期待をもって演技を見守っていましたが、演技空域への他航空機侵入のため、演技の過半数が取りやめになるというハプニングもありました。

パレード



家族も含めた記念撮影の後に、稲月期生会長から56期生の期生会長に対して記念品の目録が手渡されました。記念品は、学生側から要望のあった、「坂の上の雲全8巻」を各大隊に備え付けるというものです。

56期期生会長への記念品贈呈



記念撮影



いよいよ待ちに待った同期による懇親会です。

やや手狭な会場は同期・家族で一杯になり、約1時間の懇親会はあっという間に過ぎました。会の終盤には、齋藤同窓会会長も会場に駆け付け、激励の言葉を送りました。

齋藤会長は、防大同窓会の意義を述べた後、自身の自衛官生活を振り返り、①「卒業後20年という今の位置づけは、時期的には丁度自衛官生活の折り返し地点であり、隊務においても上司及び部下からの中間的位置づけである。なかなか大変な時期だがこれからの自衛隊生活また一般社会生活においても悔いの無いように過ごして欲しい」②「防大の同期は部内外を問わず大事な仲間である。特に統合の観点からも大変頼りになる仲間であり、同期の絆を大切にしたい」③「家族を大事にお互いに支えあって欲しい」等の言葉で激励しました。

懇親会風景



会長挨拶



会の締めくくりとして恒例の逍遙歌斉唱、今年は、現役の応援団リーダー部学生の音頭により逍遙歌を声高らかに歌い上げ、懇親会は盛会裏のうちに幕を

閉じました。

逍遥歌斉唱



懇親会の後解散となり、参加者は思い思いに校内見学や棒倒し競技を楽しんだのち、母校を後にしました。

棒倒し

